
クリスタル

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスタル

【Nコード】

N2139I

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

ただいま工事中です。

全ての設定を入れ替えますので、もう少しお待ちください。

少年と少女の出会い（前書き）

一話工事完了。

少年と少女の出会い

飄々と、風が鳴った。大地を駆け、木々を抜け、空を拝み、雲を撫で、吹き荒れる。その風は確かにある一点へと向かっていた。靈^{れい}妙森^{みょうしん}を抜けた先の、石英山と呼ばれる高い山の麓にある洞窟へ。

石英山という山は、まるで白い山だった。そして、神秘的な靈妙森を抜けた先にあるその山を見て、涙せずには居られない。——というのが噂だった。誰一人として、人間は今だかつて石英山に辿りついていないのだ。辿りつけたのは、妖怪の類ばかり。もし人間が辿りついていたとしても、帰って来た者は居ない。

そんな山の洞窟に、その風は入り込んだ。

そして、入った瞬間に白い虎の形を成す。

「散歩も時には良い物よ」

彼はそう、威厳ある声で呟いた。その声は洞窟の壁に反響し、様々な言語となって耳に戻ってくる。

少ししてから、身震いし、彼はふらりと住处へ帰った。

——この彼こそが、水晶虎とやらなのである。

*

歌を歌いながら、少年は山道を歩いていた。

すっかり暗くなっていたが、旅慣れた少年には何の障害にもならなかった。魔法も妖力も持ち合わせていないが、慣れで大半は成せるのである。危険な夜の山道を、少年は余裕の足取りで歩いていた。しかしながら、金銭的な余裕は伺えない。綺麗な金髪も手入れなどされてなく、乱れて頭上で跳ねている。目も同じく透き通った金瞳だが、眠そうだった。服も黒いお粗末なマントコートだし、唯一高価そうなのは、背中に吊り下げた二本の双剣だけだった。だが、その双剣も持ち手は擦り切れ、少年にしては少し長いという欠点が

あった。だけでも余程大事な物なのだろうか。垣間見える刃に衰えは感じられない。

小さな、百五十センチ程の背に、その双剣は似合わなかった。だけでも少年は歩き続ける。

時々魔物が現われたが、彼は疲れているのだろう、戦闘を拒否し逃げ続けた。

そして、山を越えた先の町にある、安い宿でぐっすり眠りこけた。

現在、彼の全財産は六十昌——ろくじゅうしょう。お金の単位である——で、宿は一人につき、一泊五十昌だった。

「……ふあああ……っ！」

そして彼は七時少し前に起きた。昼一時までなら何時に抜けてもいい事になっている。簡単に身なりを整えると、彼はふらふらと部屋を出た。

寂れた廊下で、女性とすれ違う。雇われている女は、愛想笑いで会釈した。

「お早う御座います。もう出られますか？」

「おはようございまあす。うーん、出ようかなあ……」

「どうされます？ 下に長椅子や新聞もあります」

「じゃあそこでゆっくりしてから、出る」

「分かりました。どうぞ、ごゆっくり」

にこにこしつつ、女性はそのまま廊下を進んでいった。彼はその背中を眺めながら、下へと降りる。

まだ七時前だった為、長椅子には人が二人しか居なかった。

——少女と、酔って長椅子で寝込む男。

少女の方は、彼とそう年齢は変わらないだろう。十五歳程の少女だった。

生憎長椅子は二つしか無い。二つの長椅子が向き合っていて、そ

の間にテーブルがある配置だ。彼は娘の座る長椅子と男の寝込んだ長椅子、そしてロビーの受付を何度か見比べ、そして長椅子へ近付いた。

少女の方は、新聞を読んでいた。

「ちよっと」

彼は声をかけた。少女は、くいつと顔を上げる。

蒼い目だった。顔を上げた動きで、上に結い上げていた、胸に垂れる浅葱色の髪が舞う。

彼はその髪の動きを目で追い、それから目へと視線を移した。どこまでも鋭く、真っ直ぐな瞳だった。

「この隣に座っていいか？」

「……………」

少女は少し戸惑い、そして前の長椅子を見て合点がいったようだった。

すぐに端へと避け、二人くらいは座れそうなスペースを空ける。

「どうぞ」

よく響く声だった。彼はその声に聞き惚れながら、無邪気に微笑む。

「ありがとう」

長椅子はふかふかだった。ついつい眠ってしまいそうなくらい、ふかふかであった。

彼は幸せそうな顔で、少し空いて隣に座る少女の方へ視線を向けた。彼女もこちらを見ていたようで、ぱつちりと目が合う。少女は一瞬だけ目を逸らしたが、すぐに彼を見た。

「そんなに幸せ？」

「……えっ？」

「そんなに、この長椅子が幸せ？」

「ああ、そうだけど。ふかふかで、ふかふかで、ふかふかじゃねえか！」

「ふか……？」

少女は可笑しそうに笑うと、その笑顔で言った。

「そうね、ふかふかだわ」

「だろ？」

その返答を聞くと少女は少し愛想笑いして、新聞に目を落とした。彼も、少女の持つ新聞に目をやる。目に飛び込んできたのは、“水晶”という文字だった。それを見た瞬間、彼は弾かれたように娘へ接近し、新聞を覗き込む。すばしっこい動きだった。

「なっ、何？」

「あ、ごめん！」

口では謝りつつも、少年は新聞を読む。

——水晶虎、発見！？

そんな見出しだった。しかし本文は目撃情報が書かれているだけで、目新しい事は書かれていない。どこそこで強い風が吹いた、なんていう本当であっても対して有効では無い事ばかりだ。

それを読み、彼は大きく溜息を吐いた。少女もちらりと目を通し、彼に問う。

「水晶虎に興味があるの？」

「まあ……一応」彼は、はぐらかした。「あんたは？」

「私？——私も、一応あるわよ。だって私、魔術師だもの」

「えっ！？」

よく見てみると、彼女の身を包むのは少女用の法衣だった。純白で、可憐なイメージを与える。

革のブーツの踵で、彼女は床を蹴った。

「風系統が得意なの。だから、風になれる水晶虎にはとても興味があるのよ」

「そう……なのか」

少年は何か値踏みするように少女を見た。

「ええ。……それより、近いんだけど」

「あっ！」

気付けば、まるで乗りかかるような格好になっていた。慌てて離

れ、隣に座る。

そして、言った。

「そうか、実は俺も探してたりする。さっきは、はぐらかしたけど」
「だろうと思った」

「……………本気で探してる？ 会いたい？ 水晶虎に」

「まあね。会って、色々と尋ねてみたいわ。彼に触れるだけで、魔法の根本を理解できるっていう噂もあるしね」

「後、真理を理解できるっていう噂もな」

「そうそう。……………詳しいじゃないの」

「親父共々、大ファンなんで」

少年はにこりと笑った。少女はそうなの、と答え、また愛想笑いで尋ねた。

「そのお父さんは、今？」

「死んだよ」

「っ!？」

「いやいや、死んだから」

あっさりと答える少年は、どこか誇らしげで、どこか悔しそうだ
った。

少女はそれを聞いて泣きそうな顔になると、小さく俯いた。

「最低」

無名ノ双剣使い

「何か起こらないものかしらね」

ライは仲のよいらしい管理人に言った。管理人は管理人部屋の椅子に座り込んで動かない。

ライは苛々などせずに、もう行こうとした。

今日も明日もココへ通うのか、とかんがえつつ。

急に体が重くなる。

これで一般的な冒険者などといえるか。ただの金稼ぎではないか。

ライが冒険者になっ賞金首倒したわけは、強くなりたかったからだった。

忌々しい過去を持つライは、過去に戻りはしない。そこで立ち止まりもしない。

ただ強くなつて生きるすすむだけだ。

「ワアッ！ どけ！」

突然声がした。

ライは、よけるのを忘れていた。

金髪をボサボサショートにして金色の瞳をした、ライより10cmくらい身長が低い少女がライにぶつかってきた。

二人とも場に転ぶ。

「すまない、ボーっとしていた」

「ったく、これだから年増は……と、いつものオツチャンじゃなかった。すまないね、年増じゃな……」

その瞬間ライはその少女の襟首をつかんでいた。

少女はライのように挑戦的に笑う。ライは、グググと少女を軽く持ち上げる。

「キャア、首がしまるわー」

「さっさと出しなさい」

「お金？」

少女は退屈そうに聞き返す。ライは重かったようでおろしながら首を横にふる。

そして、綺麗な声で言った。

「さほど器量に自信をおいているようね。ここまですべて武器をださないなんて」

「ええええ！ 武器隠してたのにバレたあ！？」

「ごめんなさい、私 眼は鋭いの」

ライは少女に微笑む。

少女は眉間に皺を寄せたがすぐ微笑んだ。

「ンだよ、おばちゃん」

「黙りなさい、小童が」

「んだつてえ！？ 私はもう15歳だあ！」

「奇遇ね。私もよ」

そういいあつた二人の顔が歪む。

同い年だったのだ。愕然とする少女に困惑するライ。

そして同時に

「わるかっ たね」

と言った。

「そうそう、ユウちゃん。この子が噂の黒ノ女銃士だよ」
管理人が言った。

すると、ユウというその少女は目を輝かした。

そしてライの手をとった。

「お願い！ 私、ユウ。クリスタルタイガーと一緒に探して！」

「……嫌よ、ごめんなさい」

「クリスタルタイガーを知らないのね、アイツに触れたらね、自分の潜在能力が開花するのよ！」

ユウの眼が子供の無邪気な笑顔のまま輝きを増す。

ライは軽く返した。

「強くなりたいからって、迷信に頼るほどなら強くなるのはあきらめなさい」

「ちがうよ。私がクリスタルタイガーに会いたいのは父と母の願いだったから」

「もうムリだから子供に夢を継がせようとも?」

「違うよ! 両親は死んだ」

ユウのいきなりの冷酷な言葉にライは言葉を失った。
しかし、不敵に笑った。

「自分だけ不幸と思ってるの?」

「ううん、両親があんなになって探してたの。私もみたくなくてさ
遺伝子……つてすごいね」

「強さがほしいんじゃないの?」

「クリスタルタイガーは走り回ってるんだよ? この大陸を! 一週間の間に長く眠り高速で走るの。」

「一週間の間の半日だけ つまり7分の1の半分だけ高速ではしるんだよお」

「よくわからないけど、だから「ギリギリおいつける」のね」

ライは納得してから管理人をみた。

管理人は一言。

「見つけるまでが修行だな」
といった。

「君にできるかな?」

「できるわ。ユウ、一緒にいきましょう」

「いいの! ?」

「修行の旅をしたかったところなの」

ライは優雅に微笑んだ。

そして、ユウとライはその状態でただ南に向かって歩き出した。

管理人によると、

「南に行ったよ」

らしかったから。

ライは、行く直前に一言だけ管理人に言う。

管理人も、言い返した。

「私が戻ってくるまで、管理人を続けてろよ。アンタの意地悪商売にまた付き合っわ」

「ここにくるまで冒険者続けとけよ。ルールわすれんな」

天才魔法少年（前書き）

読んでくれるなら幸いです

天才魔法少年

「まさか、本当についてきてくれるなんてね」
ユウが笑う。

ライは、少し苦笑いした。ユウは気づかない。気づこうともしない。
ライが嫌味のつもりではなく、率直に聞いた。

「お前、友達いる？」

「いるにきまつてるでしょ！？ 何よ？ ……その眼はー信じてないのかー！」

「だって、人のことみてないじゃない」

二人が言い合っていると、大きな音がした。

雷のような大きさの風の音だった。

ユウが、バツと回りをみた。

「な、何！？」

「あせらないの。この世には魔法つてもんがあるんだよ」

「……そうだけど」

次に少年の怒声。

ライは訝しげに辺りを見渡した。

森の奥から、蒼髪の少年が髪をポニーテールにしてこっちに向かってきていた。

ライはユウと顔を見合わせる。その少年は、バツとユウの腕をつかんだ。

「お前、俺のエメラルドを返しな！」

「えええ？」

「持つてるんだろ？なあ、もってるんだろ？ もってないとかいくなよ？」

連続の怒声にユウは耳を押さえる。

ライが少し微笑みつつ歩き出した。

「までよ！ ライ！」

「悪いけど、犯罪者と歩くにはなれなくて」

「やってねえよ！ この少年さんが勝手に誤解してるんだあああ！」
しかし、ライは止まらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139i/>

クリスタル

2011年3月19日01時36分発行